

自己紹介

数か月前、アリスティア牧師と初めてお会いしました。そのとき、先生が英国におられる間に、一度説教をとご依頼を受けました。英語での説教を日本でするのはこれが初めてです。

私は、大阪府枚方市の教会で 35 年間牧師として仕えてきました。そして、今年 3 月に引退しました。

英語は中学で習い始めたころから好きだったので、いつかは海外留学をと夢見ていましたが、そのような機会には恵まれませんでした。ですから、私の英語はメイドインジャパンです。

いろいろ間違えると思いますが、ご容赦ください。

聖書朗読：エペソ 2 : 1-7

2:1 あなたがたは自分の罪過と罪との中に死んでいた者であって、 2:2 そのころは、それらの罪の中にあってこの世の流れに従い、空中の権威を持つ支配者として今も不従順の子らの中に働いている霊に従って、歩んでいました。 2:3 私たちもみな、かつては不従順の子らの中にあって、自分の肉の欲の中に生き、肉と心の望むままを行い、ほかの人たちと同じように、生まれながら御怒りを受けるべき子らでした。 2:4 しかし、あわれみ豊かな神は、私たちを愛してくださったその大きな愛のゆえに、 2:5 罪過の中に死んでいたこの私たちをキリストとともに生かし、—あなたがたが救われたのは、ただ恵みによるのです— 2:6 キリスト・イエスにおいて、ともによみがえらせ、ともに天の所にすわらせてくださいました。 2:7 それは、あとに来る世々において、このすぐれて豊かな御恵みを、キリスト・イエスにおいて私たちに賜る慈愛によって明らかにお示しになるためでした。

今日のメッセージは、「クリスチャンとはどのような人たちか」と題しました。

ここにおられるほとんどの人がクリスチャンでしょう。皆さんは、「私はもう長年クリスチャンだし、クリスチャンとして生きることについてはよくわかっているの、今日のメッセージは聞かなくてもいいか」と思われるかもしれません。

では、クリスチャンとはどのような人でしょう。

そう聞かれると、こんなふうに答えるのではないでしょうか。

クリスチャンとは：

①イエス・キリストを救い主と信じている。すべての罪が赦されて救われているので、神とともに生きられる永遠のいのちを持っている。

②救われて、死後は天国、つまり神の御国に行く。

次のように付け加える人もいるかもしれません。

③私たちには聖霊、つまり神の御霊が内に住んでおられる。

だいたい、このように答えるでしょう。

もちろん、聖書に約束されているとおり、ここに挙げた事柄はすべてそのとおりです。

けれども、今日の聖書箇所では、先ほど挙げた事柄以上のことが語られていると私は思います。

1. クリスチャンになる前 (1-3 節)

1-3 節には、私たちがクリスチャンになる前、どんな人であったかが記されています。

2:1 あなたがたは自分の罪過と罪との中に死んでいた者であって、

つまり、心も体も元気で生きていたとしても、霊的には死んでいたということです。では、私たちの霊はどのような働きをするのでしょうか。聖書を読むと、人間の霊は神と交わるという働きがある

ことがわかります。ですから、私たちの霊が死んでいたなら、神を感じることも、神と関わりを持つこともできません。「神様がいると感じないから、神様なんていない」と言う人がいます。けれども、それは神がいないという証拠ではありません。むしろ、その人たちの霊が死んでいることの証拠なのです。

2:2 そのころは、それらの罪の中にあつてこの世の流れに従い、…

「この世」というのは、真の神を知らない人々という意味です。つまり、神を知らない人たちの生き方に追随するということです。

2:2 …空中の権威を持つ支配者として今も不従順の子らの中に働いている霊に従って、歩んでいました。

ここで「支配者」と「霊」という単語は単数形です。ですから、これは悪霊のことではなく、その首領であるサタンを指しています。私たちは神を知らず、自分の好きなもの、楽しいこと、心地よいものを追い求めていました。サタンの目標は、神から人を引き離しておくことです。ですから、自分の欲望や願望を追求していた私たちは、サタンに従っていたこととなります。

2:3 私たちもみな、かつては不従順の子らの中にあつて、…生まれながら御怒りを受けるべき子らでした。

私たちはこのような状態でした。けれども、神が私たちの人生に介入してくださいました。4節からは、神が主語です。

2. クリスチャンとはどのような人たちか (4-7節)

2:4 しかし、あわれみ豊かな神は、私たちを愛してくださったその大きな愛のゆえに、
2:5 罪過の中に死んでいたこの私たちをキリストとともに生かし、…

キリストを信じる前の私たちは、霊が死んでいたのも、神を知ることも感じることもできませんでした。けれども、イエスを救い主として信じたとき、私たちの罪はすべて赦され、神のいのちが私たちの霊に注がれました。こうして、私たちは神を知ることができるようになり、神と交わり、神の愛を感じるようになるようになりました。

私は、いったんイエスを信じたクリスチャンに、「私はキリストを信じたので救われている」という確信が与えられるのをこれまでに見てきました。私はこれまでに教会員の葬儀を何度も執り行いました。地上での命が終わりに近づいたとき、「あなたはイエスを信じているから天国に行きますよ」とその人たちに私から言い聞かせる必要はありません。どの人も、天国に行つて神とともに過ごせるという平安と確信を持っていました。

また、たくさんのノンクリスチャンにも出会いました。ノンクリスチャンの方々と議論をしたこともあります。けれども、自分が救われているとか天国に行けるという確信を持っているノンクリスチャンとは会ったことがありません。信心深い人でも、救われているとか天国に行けるという平安を持った人はひとりもいませんでした。「エホバの証人」と名乗る熱心な人たちも同じです。エホバの証人の人たちは、「救われたいので一生懸命に奉仕をしています。これをしないと救われないから、続けます」と言います。

クリスチャンの救いの確信は穏やかなものであっても、神から与えられるものですから力強いものです。神は、救われたという平安を私たちの心に保ってくださいます。

「確かに天国には行けるけど、天国の端っこのほうに座っていると思う」とクリスチャンが言うのを聞いたことがあります。これは、「自分は立派なクリスチャンではないから、天国の真ん中に行くような資格はないけれど、確かに天国には行ける」という正直な意見でしょう。

では、6節です。神は私たちのために何をしてくださったのでしょうか。

2:6 キリスト・イエスにおいて、ともによみがえらせ…くださいました。

キリストは十字架にかけられ、死なれました。その三日後、神はキリストを死からよみがえらされました。その同じ力で、神は私たちの霊をよみがえらせ、ご自身のいのちを私たちの霊に吹き込んでくださいました。これは、私たちがキリストを救い主として信じて受け入れたときに起こったことです。

2:6 キリスト・イエスにおいて、ともによみがえらせ、ともに天の所にすわらせてくださいました。

つまり、私たちは今現在この地上に生きていると同時に、すでに天でイエスとともに座っているのです。新約聖書のギリシャ語では、「ともに…すわらせてくださいました。」を指す言葉はひとつの単語です。これは、私たちが天国でイエスのとなりに並んで座っている姿を描きます。もしそうなら、私たちは主の愛とあわれみ、そして失われた人々に対する優しく熱い思いに圧倒されるはずで、また、天国を満たす神の栄光にも圧倒されるでしょう。

けれども、この地上で生きている今、私たちクリスチャンにそのようなことが起きているのでしょうか。

ずいぶん昔のことですが、私には6節がよくわかりませんでした。

クリスチャンが死んだら、その霊は天国に行ってキリストとともにいます。

けれども、この個所には、神が私たちが「キリスト・イエスにおいて、ともによみがえらせ、ともに天の所にすわらせてくださいました。」とあります。過去形です。つまり、私たちはイエスを信じたときに、神が私たちがすでに天にキリストとともに座らせてくださったという意味のはずです。本当なののでしょうか。

長年牧師として仕えてきて、私はこのように説明しました。「クリスチャンは死んだら天国に行けます。これは確かなことです。ですから、これはもうすでに起こった事のように語られているのです。ですから、これは過去形なのです。」この私の解釈は正しいのでしょうか。おそらく違うでしょう。

私はこのことについてずっと考えを巡らせました。

そして、このすぐ前の個所にあるパウロの祈りがカギであることに気づきました。1:16-19です。

エペソ 1:16-19

1:16 あなたがたのために絶えず感謝をささげ、あなたがたのことを覚えて祈っています。 1:17 どうか、私たちの主イエス・キリストの神、すなわち栄光の父が、神を知るための知恵と啓示の御霊を、あなたがたに与えてくださいますように。 1:18 また、あなたがたの心の目がはっきり見えるようになって、神の召しによって与えられる望みがどのようなものか、聖徒の受け継ぐものがどのように栄光に富んだものか、 1:19 また、神の全能の力の働きによって私たち信じる者に働く神のすぐれた力がどのように偉大なものであるかを、あなたがたが知るができますように。

1:16 あなたがたのために絶えず感謝をささげ、あなたがたのことを覚えて祈っています。

パウロはここで、エペソにいるクリスチャンのために絶えず感謝をささげ、祈っています。では、どのようなことを祈ったのでしょうか。パウロが絶えず祈っていた内容ですから、とても重要な祈りに違いありません。

1:17 どうか、私たちの主イエス・キリストの神、すなわち栄光の父が、神を知るための知恵と啓示の御霊を、あなたがたに与えてくださいますように。

パウロは、神が彼らに聖霊を与えてくださるようにと祈り続けました。けれども、彼らはクリスチャンです。ですから、すでに聖霊をいただいています。パウロが祈り求めているのは、彼らのうちにおられる聖霊が、神ご自身を現してくださることです。信徒たちが神をよりよく知るためです。パウロの祈りは続きます。

1:18 また、あなたがたの心の目がはっきり見えるようになって、神の召しによって与えられる望みがどのようなものか、聖徒の受け継ぐものがどのように栄光に富んだものか、

彼らが受け継いだ希望と栄光の富について知るようにと、パウロは常に祈りました。

1:19 また、神の全能の力の働きによって私たち信じる者に働く神のすぐれた力がどのように偉大なものであるかを、あなたがたが知ることができますように。

19 節は、神のすぐれた力がクリスチャンのために働くと語ります。そして、神の全能の力がそこにあります。彼らが知るように、というのがパウロの常に祈っていた内容の本質です。

この個所には、ふたつのタイプのクリスチャンがいることが示されていると思います。

タイプ 1：神の全能の力がその人たちのうちに働いていて、本人がそのことをわかっている。

タイプ 2：神の全能の力がその人たちのうちに働いているが、本人はそのことを知らない。

すべてのクリスチャンのうちに神の全能の力が働いているわけですから、パウロの祈りはそのことを知らない人のためであり、彼らがこの事実を知るように、という祈りです。パウロはこのことを常に祈っていました。

私は 40 年以上前にクリスチャンになりました。私は、救われたことを大いに喜んでいました。そして、クリスチャンとして成長し始めました。けれども、数年でその成長が低迷しました。周囲のクリスチャンを見ても同じように、クリスチャンになって数年後には成長が低迷しました。皆さんもそんな経験をしたことがありますか。

私の教団には、小さな神学校があります。牧師はそこでも教えます。私は牧会学を教えています。牧会学では、クリスチャンがどのように信仰の成長を遂げるかについて学びます。授業では、学生たちに次のようなことを尋ねます。クリスチャンは救われてからよいペースを保ってコンスタントに成長しつづけますか。それとも、救われてしばらくするとそのペースは落ちるのでしょうか。学生たちの答えはたいがい、「クリスチャンの成長は救われて 2-3 年でペースが落ちる」というものです。私も同じ意見です。

ある男性は、とても熱心な信徒でしたが、周囲の人とよくもめることがありました。これに、周囲の人私も困っていました。私は神に愚痴を言いました。「神様、あの人はクリスチャンなのに、どうしていつまでたってもこの部分が成長しないのでしょうか。」私はこの問題に長年悩まされました。そして徐々に、パウロがクリスチャンの信仰の成長のために絶えず祈っていたことに気づかされました。私もこの人のためにただ祈ればよいではないかと思ったのです。そして、パウロに倣って私もときおり祈るようになりました。「主よ、どうか彼を助けてください。あなたのことをもっともっとよく知ることができますように。そして、私もあなたのことをもっともっと知ることが

できますように。そうやって私たちがともにあなたの聖霊様に満たされて、イエスさまとともに座っているかのような状態になりますように。」するとまもなく、少しずつですがこの信徒が変えられていくのを感じました。私は時々、彼のために、そして私自身のために祈りました。そして、数年かけてこの人が変えられていくのを見ました。今ではこの信徒は、愛情豊かで謙虚で神にささげたクリスチャンです。私はただ、神が彼のために、そして私のためになしてくださった御業に驚くばかりです。

また、ある信徒の夫婦はけんかが絶えませんでした。私はよくふたりの様子を見てため息交じりに「ふたりは長年クリスチャンなのに、どうしてこれほど夫婦仲が悪いのだろう」と思いました。そして何年も経ってから、ふたりのために祈り始めました。このご夫婦のうちに、そして私のうちに神のご臨在が示されますようにと祈りました。すると神は、ふたりを変える御業を始められました。数年が経ち、ふたりのことをある人が「あのご夫婦は教会でも一番幸せそうだ」と言っているのを聞きました。私は、神の御業をたたえました。

エペソ 2 : 7 を読みましょう。

2:7 それは、あとに来る世々において、このすぐれて豊かな御恵みを、キリスト・イエスにおいて私たちに賜る慈愛によって明らかに示されるためでした。

「あとに来る世々」とはいつのことでしょう。パウロがこの手紙を書いたのは、紀元 60 年ごろです。ですから、「あとに来る世々」とは、それ以後のすべての時代を指します。1 世紀後半、2 世紀、3 世紀、20 世紀、そして 21 世紀も含まれます。どんな時代でも、神が「このすぐれて豊かな御恵みを」示されるためです。それはどのように示されるのでしょうか。前の 6 節が語るとおり、神が「キリスト・イエスにおいて、ともによみがえらせ、ともに天の所にすわらせてくださいました。」という事実によって示されました。

私たちは今はまだ地上にいます。けれども、イエスは常に、私たちとともに座ってくださっています。となりに、とても近くにいてくださいます。そして、ご自身とその豊かさを示したいと望んでくださいます。

クリスチャンとはどのような人たちでしょう。
キリスト・イエスを信じて救われた人です。
そして、すでに天国でキリストとともにキリストの近くに座っている人です。

ですから、私たちは主とともにいます。主とともに歩みます。そして、主とともに語らいます。それは、私たちに対して、また私たちをとおして注がれる神ご自身の豊かさを神がお示しになるためです。それは、周囲の人たちが日々私たちをとおして輝く神の栄光を知るようになるためです。